本年度２回目の弱視教育担当者ネットワーク会を、平成 28 年 12 月 27 日（火）に実施しました。第１回と同様に、弱視教育の専門性の向上、問題や課題の共有、連携強化を目的に研修を行いました。ご多用の中、県内各地から弱視児童生徒の教育に関わる先生方にご出席いただきました。

研修１では、本校職員の林から「弱視教育における最新の情報と全国的な動向」についてご報告させていただきました。

近年、盲学校の在籍者数が減少する一方で、弱視学級の在籍者数は全国的に増加しており、今後も、盲学校と地域の学校との連携・協力がより一層、必要となりそうです。

そうした状況の中、弱視特別支援学級に求められることとして、弱視教育の理解啓発、各児童生徒に応じた教育課程の編成、支援計画・指導計画の作成、児童生徒との信頼関係の構築等が挙げられました。また、弱視特別支援学級での教育をサポートするため、盲学校にも、専門性の継承、情報発信、相談業務を充実させ、センター的機能を充実させることが求められていることが示されました。報告の最後に、弱視児童生徒理解のために作られた紙芝居と、通常学級、弱視特別支援学級、盲学校の全てを経験した当事者の方の作文が紹介されました。

研修２では、弱視児童生徒の理解啓発をテーマに、ワークショップを行いました。校種別に児童生徒の作文や取組の事例を紹介し、自身の見えにくさを具体的に理解していく過程や、担任の先生の理解啓発授業の取組を、児童生徒の心境の変化も合わせて紹介しました。見えにくさの理解については視力０.１以下に用いる大きなランドルト環を実際に提示して紹介しました。各学校で関わっている児童生徒とも重なる部分があり、多くの質問が寄せられ活発な研修となりました。

今回紹介された事例を通して、「〇〇さんは～すれば・・できる。」という前向きな考え方で取り組むことが、本人の積極性や社会性を育てるうえで大切だということが示唆されました。また、本人だけでなく、交流学級の児童生徒にも、理解啓発を行っていくことが、地域で学ぶうえで重要なカギになりそうです。

【アンケートより】

・子供の作文や紙芝居を通して気づけていない部分を発見させていただきました。
・見えていない状況を理解していないかを実感しショックを受けました。
・子供と（自身の障害を）受容することに付き合っていきたいです。

など、多くの感想をいただきました。